

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520122
 研究課題名（和文） ルノルマン・ド・トゥルヌエムの美術アカデミー改革と 18 世紀フランス美術
 研究課題名（英文） The reform of the Royal Academy of paintings and sculptures by Lenormand de Tournehem and the French art in the 18th century

研究代表者
 大野 芳材 (ONO YOSHIKI)
 青山学院女子短期大学・芸術学科・教授
 研究者番号：50213822

研究成果の概要（和文）：ルノルマン・ド・トゥルヌエムが具体的に何を改革したか、また彼を改革に駆り立てずにはおかなかった当時のフランス、ことにパリの美術とそれを取り巻く環境の調査を集中して行った。定期的な美術作品の展覧会（サロン）がもたらした美術鑑賞者の増大とそこから派生した状況という、トゥルヌエムが手本としたコルベールが思いもしなかった事態が、彼の改革を特徴付ける。トゥルヌエムの改革に無関係とは思われない 1746 年のサロンの出品作のカタログを制作し、それを対象にした美術批評の嚆矢ラフォン・ド・サン＝ティエンヌの著作の翻訳と註解を進めている。

研究成果の概要（英文）：Seeking to make clear concretely what Lenormant de Tournehem, *Directeur des batiments du roi*, had realized during his directorate and the social and artistic conditions which had obliged him to reform the Royal Academy of Paintings and Sculptures, we searched written documents as well as images produced in the time. We came to grasp the importance of public exhibitions called Salon, especially that of 1746 which could have influence Tournehem's principles. We examined in detail the text of La Font de Saint-Yenne, known as the first review of art exhibitions, and made the catalogue of works appeared in that occasion. We are translating La Font's book in Japanese with copious notes in order to publish it.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 2007 年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 2008 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：王立絵画彫刻アカデミー

王室建造物局総監ルノルマン・ド・トゥルヌエム

サロン

美術批評

ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ
公衆

1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀フランス美術の研究は、ようやく最近になって研究者の関心を引くようになってきたが、ルネサンスや古典主義、あるいは19世紀以降の近代美術に比べれば研究の蓄積は少ない。

個々の画家や彫刻家の研究はフランスを中心に格段に進んだが、いまだこの時代の画家たちに大きな影響を与えた王立絵画彫刻アカデミーの体系的な研究は少ない。

(2) 王立絵画彫刻アカデミーの草創期の研究をかつて行ったことのある私自身の知見をもとにして、18世紀のアカデミーの展開を、世紀半ばにその行政上の責任者となったルノルマン・ド・トゥルヌエムを中心に考えると、研究の糸口が開けるように思われる。

(3) ロココ美術への最初の総合的な批判の書の作者として知られるラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌの著作は、名のみ高く体系的な研究が成されていない。この著作を、それが批判している美術作品と付き合いながら読み込むことで、18世紀半ばのフランスの美術について、具体的な知見が得られる、という予想が立てられる。

2. 研究の目的

(1) ルノルマン・ド・トゥルヌエムが王室建造物総監になったのは1745年の暮れのこと、歿する1751年までこの役職にあって、18世紀半ばのフランス美術の動向を決定するような様々な施策をとったことが知られている。

私がかつてトゥルヌエムが主催した1747年の絵画コンクールを調べて論文にまとめたことがあって、彼の改革の骨格が17世紀古典主義の再興にあることはわかっていたが、それがいかなる背景のもとで実行されたのかは十分に調べ切れていなかった。そのことを明らかにすること。

(2) ダンタン公爵は王室建造物局総監として、トゥルヌエムに先立つこと20年前の1727年に「歴史画のコンクール」を行った。その内容を具体的に明らかにすること。

さらにダンタン公爵がこうした計画を立てた背景と意図、およびその結果について調査をして、18世紀20年代の王立絵画彫刻アカデミーの実態を明らかにすること。

(3) トゥルヌエムの絵画コンクールとダンタンの歴史画コンクールとの、実施された状況とその結果を比較し検討すること。

20年間で何が変わったのか、あるいは単なる先例の繰り返しであったのか。

(4) 1737年からサロンが定期的開催されるようになった。それが当時の人々からどのような関心をもって迎えられていたかを明らかにし、どのような結果をもたらしたかを調査すること。

(5) 1737年から1751年まで、王立美術アカデミーを中心に、フランス美術の動向を精査すること。

(6) サロンへの審査制の導入やリュクサンブール宮殿に仮の美術作品展示会場を設けるなど、トゥルヌエムの改革の実態を、当時の美術の現状に即して具体的に理解すること。

3. 研究の方法

(1) 当時の王立絵画彫刻アカデミーについての基本書で、数少ない研究書である Jean Locquin, *La peinture d' Histoire en France de 1747 à 1785*, Paris, 1912, Paris: rééd. en 1978, Paris を再調査し、そこに挙げられている資料を検証する。

(2) 当時の王立絵画彫刻アカデミーの動向を知るために、アカデミー議事録を調査する。

(3) サロンの出品作品について記した小冊子(リヴレ)を調査する。

(4) サロンをはじめ、王立絵画彫刻アカデミーや美術の動向を知るために、当時の定期刊行物である *Mercure de France*, *Journal de Trévoux* などを調査する。

(5) ブーシェやシャルダン、シャルル=アントワーヌ・コワペルなど、当時活躍していた画家のカタログ・レゾネを調査して、トゥルヌエムの総監時代に制作された作品を中心に、文書資料と図像資料を集める。

(6) ルーヴル美術館やエルミタージュ美術館など、各地の美術館の作品目録を調査して、18世紀の美術作品についての文書資料と図像資料を集める。

(7) トゥルヌエムの総監時代の王立絵画彫刻アカデミーを知るために、改めてこの組織の成立の経緯を調査する。

(8) 王立絵画彫刻アカデミーの性格を明らかにするために、この組織に所属しない画家たちの活動を調査する。

(9) 1746年のサロンの出品作品についてのデータを可能な限り集めて、図像、技法、現在の所在地、関連する参考文献を網羅した作品カタログを制作する。

(10) ラ・フォン・ド・サン=ティエンヌの著作とともに同時代のルブラン師などの美術批評を調査して、ラ・フォンの批評の特色を浮彫にすること。

(11) 上記の研究を進めるために、青山学院女子短期大学図書館や、東京大学図書館、一橋大学図書館、さらに国立西洋美術館研究資料センターで資料を調査する。

またフランスの国立図書館や国立美術史研究所図書館、ルーヴル美術館の資料室などで調査を行う。

フランスの研究者からも協力を得る。

(12) 1746年のサロン出品作のカタログ制作を行うために、研究協力者の助力をあおぐ。

4. 研究成果

(1) ルノルマン・ド・トゥルヌエムが王室建造物局総監になってまもなく行った1747年の絵画コンクールは、1746年のサロンとその批評と関わりがあると考えられるが、いまだそれを文書で確証するには至っていない。

(2) ルノルマンの絵画コンクールは、ダンタン公爵が20年前に行った歴史画のコンクールと同様の意図、すなわち17世紀の王立絵画彫刻アカデミー草創期に形成された古典主義絵画を復興することにあつた。しかし、その結果はフランス絵画の将来を担うような才能を発掘するにはいたらず、現状を追認したにすぎなかった。参加者全員に等しく賞を与えたのはその証左である。

その理由はルノルマン自身の技量の問題であると同時に、総督が判断を下すことをためらわせるほどの、1737年以降に定期化したサロンによる鑑賞者層の増大にあると考えられる。

(3) 美術の鑑賞という問題を考える上で、「公衆」という問題がきわめて重要である。このpublicは18世紀初期の美術理論書には美術作品の「よき審判」として登場する。それは教養を備えた少数の美術愛好家を意味した。しかし、18世紀半ばトゥルヌエムの時代には、鑑賞者層の拡大を背景に、その内容に大きな変化が生じたように考えられる。

公衆の教化というラ・フォン・ド・サン=ティエンヌの提言も、トゥルヌエムの改革も、こうした受容者層の変化をひとつの大きな要因にしている。

(4) 王立絵画彫刻アカデミーの活動のほかに、中世以来の親方組合の伝統をひく聖ルカ・アカデミーが18世紀初頭から王立アカデミーと同じような教育を行うなど活発な活動をしていたことがわかった。それに属する画家たちは風俗画や風景画など低次とされた絵画ジャンルを主に制作し、18世紀半ばから展覧会も開催する。彼らの活動の実態の調査が今後の課題である。

(5) 1746年のサロン出品作をリヴレで確認し、カタログの制作を行った。今日所在が確認できるものは、これまでのところおよそ3分の1にすぎない。

ルーヴル美術館の学芸員から、美術市場の売り立ての調査も重要であることを指摘された。

今後も調査を継続する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕(計3件)

①大野芳材「子どもへの眼差し—シャルダンをめぐって」『ルーヴル美術館展—美の宮殿の子どもたち』東京・国立新美術館、国立国際美術館、2009年、pp.232-237。

②大野芳材「伝統と革新—近世から近代初期のフランスの肖像画をめぐって」『肖像の100年』ポーラ美術館、2009年、pp.8-13。

③大野芳材「物語を織る」『ルーヴル美術館展—フランス宮廷の美—』東京都美術館、神戸市博物館、2008年、pp.226-233。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 芳材 (ONO YOSHIKI)

青山学院女子短期大学・芸術学科・教授

研究者番号：50213822